東京のホテルの結婚式会場で、ウェディングドレスを着た愛嬌りこはひな壇で笑顔を浮かべていた。まぁ着てるっつーか着せられてるっつーか、どっからどう見てもお人形さんにしか見えないんだけど。

身長百四十五センチの彼女の横には、百八十センチを誇る新郎の和田俊哉。顔は冴えないしなんかパッとしないけど、物腰は柔らかく気遣いが出来て、礼儀正しく温厚な人。ＩＴ企業に勤めていてＩＴインフラソリューションとかいうのを担当しているらしい。収入はそこそこ良い。つまりパッとしない顔に目をつむれば性格も収入も問題無しってこと。

高校時代からの親友が結婚した。嬉しいはずだ。でも、私は嬉しくなかった。理由は分からない。でも、心がモヤモヤしてる。

私は結婚願望なんて大して持ってないから、自分より早く結婚した親友に嫉妬してる訳じゃないと思う。新郎が気に食わない訳でもない。じゃあ、なんで？

「あの、もしかして千瀬奈々さんですか？」

後ろから話しかけられた。振り返るとそこには、りこの大学時代の友達がいた。見るからにミーハーそうな、コピーして大量生産したような特徴のない女。

「……そうですけど？」

女は甲高い声をあげた。隣に座っている可奈子が音を立てながらオレンジジュースを飲んだ。

「うわーやっぱり！　りこって本当に芸能人の友達が居たんですね。あの、握手してもらっていいですか？」

「あ？　あー……。別にいいけど」

女は握手をすると、興奮した様子で聞いてきた。

「あの、私札幌大学ではりこの友達で……。奈々さんが出てるテレビ何度か見たことあります。えっと、東京に居るって事は、もしかして東京でも活動始めたんですか？」

お前はりこの友達って事をアピールしたいのか、私が出てたテレビの感想を言いたいのか、それとも私の近況を知りたいのか、ハッキリしてくれ。

「いや、札幌で活動してる。私とこいつ……。可奈子もね、結婚式に呼ばれたからさ、わざわざ東京まで来ただけ。エアドゥで」

女は「頑張ってください！」とか「応援してますー」とか言って元いた席に戻っていった。また甲高い声でなんか叫んでる。周りに居る友人たちは苦笑していた。

「いやぁ、芸能人は辛いねぇ」

「まぁね」

「にしてもさ、アンタ今のはさすがに態度悪すぎない？　後でツイッターで悪

口書かれるよ」
「愛想良いキャラで売ってる覚えなんかねーよ。バカ」
　私は美容系の専門学校を卒業した後、半年くらいふらふらしてた。そしてある日スカウトされて、まぁなんか暇だし、面白そうだから良いかなって思って札幌の小さい事務所に所属した。それが二十歳の頃。いつの間にか五年の歳月が過ぎて、私は二十五歳になっていた。
　つってもマジで芸能人やる気なんて無いから、札幌ローカルの番組に出たり、ちょっと写真集出してみたりしてるだけで、私の事を知っている人は本当に少ないと思うけどね。私のように地方でちまちま芸能人やってる人間なんて腐るほどいる。
　可奈子はオレンジジュースを飲み干して、雑にグラスをテーブルに置いた。ちらっと横目で私の顔を盗み見る。
「シケた顔してんね。今はりこの葬式じゃなくて結婚式だよ」
「なんか、引っかかるんだ」
「なんかって？」
「嬉しくない」
「え、なに。アンタりこの事好きだったの？」
「可奈子は嬉しい？　嬉しくない？」
「嬉しいよ。ただ……」
「ただ？」
「私も、ね。ちょっと引っかかるんだ」
「心当たりは？」
「指輪」
　私はりこに視線を向けた。彼女の右手の薬指には婚約指輪がはめられている。後で指輪交換をする事を考えて右手に付けてるんだろう。
「指輪がどうかした？」
「なーんか忘れてる気がするんだよね」
　指輪に関する心当たりなら無くはない。
　りこは香連高校を卒業した後は札幌大学に通って無事卒業し、東京の小さな会社に就職した。そして二十四歳の夏に和田俊哉と出会い、あっという間に婚約した。りこは彼と出会った時、まさか一年後の夏に結婚式を挙げてるなんて未来を想像しただろうか。
　出会ってから一年で結婚。たったそれだけの期間で結婚を決められるほどの愛だの恋が成就するものなのか、甚だ疑問ではある。
　それはさておき、りこは今年のゴールデンウィークに札幌へ戻ってきた。そ

して私と可奈子、今日は高校の教師の仕事が忙しくて来られなかった笠原夏海と一緒に時間が許す限り遊んだ。そして、りこは札幌に居る間、見たこともない指輪を右手の中指に付けていた。
和田俊哉にもらった物だろうと思った。でも、それにしては安っぽいっていうか、デザインもなんか、そこら辺の雑貨屋に五千円くらいで売ってそうな物だった。
私はりこに聞いた。そのダサい指輪、どうしたの？　りこは笑った。
「なんでもない」
なんでもない。そんな答えが返ってくるって事は、少なくとも新郎にもらった指輪ではない、いわくつきの指輪と考えるのが妥当だろう。
私はりこをまじまじと見つめた。彼女は笑っている。未だに道端でタバコを吸ってると中学生と誤解されて警察に補導されかける彼女は、確かに幸せそうだった。

結婚式が終わり、二次会も終わった。普通ならここでお開きか三次会へ突入するもんだ。そしてりこは確かに三次会を開いたけど、参加者はりこと私と可奈子の三人だけだった。事実上、彼女の結婚式は二次会で終了した。
私達は特に小奇麗でもなく、オシャレでもなく、ただ狭くて暗くて、バーに慣れてない人でも気軽に来店出来そうな、安っぽいバーのカウンターに並んで座った。りこが真ん中で、私と可奈子が両サイドに座っている。
「えー。じゃあ、改めて？　りー丸の結婚を祝してー」
「かんぱーい」
「かんぱーい！」
「人生にかんぱーい！」
私達はカクテルの入ったグラスで乾杯した。りこは水色のスピンドルワンピースを着ているけど、その童顔のせいで今にも山へ虫取りにでも行きそうな無邪気な女の子にしか見えない。
「つーかさぁ、りこが一番早く結婚するとは思わなかったね。私は夏海が一番手だと思ってた」
「そう？　私は奈々が先だと思ってた」
りこが私の事を奈々ちゃん、と呼ばなくなったのは、果たしていつ頃からだったかな。
「結婚ねー……。考えなくはないけど、あんま興味無いな」
可奈子がふかーいため息をついて、カクテルを不味そうに飲んだ。
「もったいねーな。お前なら結婚相手の二人や三人いつでも持ってこられるだ

ろ」
「そうだよ。芸能活動だってさ、奈々だったら本気出せばてっぺん取れるよ。声優の仕事断っちゃったんでしょ？」
「別に受けても良かったんだけどさ、ほら、その仕事受けた時ね、なんか機嫌悪かったから」
「あぁ、そこら辺の仕事熱心なフリーターの方がよっぽろ偉いね」
頑張らなくても仕事が来る。世の中には私みたいな人種が確かに存在する。そういう人種の特徴は二つある。才能、そして顔。私は完全に顔だけで人生なんとかやってるタイプだ。
そう、人生ってそんなもんだ。才能あるやつに限って頑張らない。逆に才能無い奴に限って、無茶な夢を見る。
でも、そんな事は言ってられない。いくら美人と言っても私はもう二十五歳。女というだけでちやほやされる年齢は、もう終わりに近づいている。いや、むしろもう終わってるかも？
「……りこ」
「なぁに？」
「お前、幸せか？」
可奈子が飲んでいたカクテルにむせて、漫画のように吹き出した。
「あのさ、それついさっき結婚式を挙げた奴に聞くセリフか？　頭大丈夫？」
りこは小さく首をかしげて、私の顔をじぃっと見つめた。
「……奈々」
「あ？」
りこはカクテルをちびちび飲んで、小さく笑った。
「気づいちゃった？」
「……何が？」
「……なんでもない」
なんでもない。また引っかかる言い方。脳裏にあの指輪が思い起こされる。ゴールデンウィークの日。琴似の居酒屋で。大通りのカラオケで。札幌駅の映画館で。彼女がずっと付けていた、あの安っぽい指輪。
もう一度聞いてみたかった。でも追求するみたいで嫌だったから、私は何も聞かなかった。その後は思い出話に華を咲かせ続けた。
大分時間が過ぎた頃、会話が途切れた。そろそろ終わりか、みたいな空気が流れた。この瞬間が私は一番嫌いだった。帰りたくない。まだ話を続けたい。誰かが「帰ろうか」って口にするのを、心の中で言わないでって願っちゃう。
でも、りこがすっと立ち上がった。

「そろそろ帰ろう。明日早いんだ」
可奈子も「よっこらせ」と言いながら立ち上がった。
「まぁ私達も明日帰んなきゃいけないからね。奢ってやっか？」
りこはぶんぶんと首を横に振った。そして、結婚式会場では一切見せなかったクッソムカつく不敵な笑みを浮かべた。
「結婚した友達にお酒を奢ります。いやぁ、ありふれた友情ですねぇ」
可奈子は目を見開き、そしてゲラゲラ笑ってりこの頭をくしゃくしゃっと撫で回した。
「ありがとよ。ご祝儀返せ」

店を出た。空は暗く、地上は明るかった。当たり前だけど、東京の夜は見慣れなくて私はなんだか不安になった。でも、今のりこにとってはこの東京の夜こそが日常なんだ。
私の日常は、いつまで経っても変わらない。同じ場所で過ごしている限り、ずっと同じ景色を見続ける。
私と可奈子が滞在しているホテルの前までりこはついてきてくれた。りこはすぐに新婚旅行に行くから、明日は見送りに来られないらしい。
だから、今日でりことはしばらくお別れだ。ワンピースに身を包んだりこは、夜風でショートヘアを揺らしながら、ちょっと悲しそうな笑みを浮かべた。
「また今度ね」
「あぁ、また遊びに来るよ」
「ご祝儀返せ」
「ん。暇出来たらさ、また札幌行くよ。お盆とかお正月とか」
「待ってる。じゃあ、まぁ……。頑張って」
何を頑張って欲しいのか自分でも分からないけど、最後にかける言葉は見つからなかった。気恥ずかしくて私はりこに背を向けた。可奈子と一緒に歩き出す。
背後から、りこの叫ぶ声が響いた。涙を含んだ、悲痛な叫び。
「奈々ちゃん、私、幸せだよ」

りこの結婚式から一ヶ月後。私は街から少し外れた所にある小さな本屋へ寄った。そろそろ芸能活動もどきも終わりかなと思って、アルバイト情報誌を買おうと思った。
そしてアル北をレジカウンターに放り投げて、唖然とした。
レジに立っているのは、りこが大学時代付き合っていた北沢俊介という男だ

った。何度か会った事がある。イケメンで気立てが良くて、私はこいつの事を結構気に入っていた。つーか、りこが結婚するならこいつだと思ってた。
げんなりした。確かこの店は店長以外は全員バイトだから、こいつは二十五歳になっても未だにフリーターなんだろう。
悲しいよね。大学時代付き合っていた二人の末路。方や東京で就職、結婚。方や札幌でフリーター。
私は会計を済ませ、アル北をカバンに突っ込んで店を出た。暑かった。今日は天気が良すぎる。体中から汗が吹き出して、気持ち悪い。風もぬるくて、マジやってらんねぇ。
いや、暑いのは気温のせいだけじゃない。私は見た。北沢の右手の中指には、りこと同じ指輪がはめられていた。
りこと北沢は大学一年で出会い、卒業するまで四年間ずっと付き合っていた。でも北沢は就職が決まらず、りこは東京へ就職する事が決まった。私は二人が遠距離恋愛を成功する事を祈っていた。でも二人はタイミング悪く、りこが東京へ旅立つ一ヶ月前に些細な事が原因で喧嘩をしてしまった。そして仲直り出来ないままりこは東京へ行き、そのまま二人の関係は自然消滅した。
でも。
りこは札幌に戻ってきた時、北沢と同じ指輪をはめていた。そして、北沢は今も指輪をはめている。
りこが北沢にプレゼントしたのか、北沢がりこにプレゼントしたのか、それとも二人で一緒に買ったのか、それは分からない。ただ、四年間付き合っていた男女が、偶然同じ安っぽい指輪を付けていたとは考えられない。
私は夕暮れ時の、見慣れた札幌の街並みを眺めながら立ち尽くした。
りこ、アンタは東京でずっと北沢の事を考えていたんじゃないの？
ねぇ、りこ。多分、こんな事は永遠に聞けないと思う。
でもさ、もしかしたらアンタは結婚した和田俊哉よりも、北沢の方が好きなんじゃないの？　だけどアンタはもう二十五歳で、色々焦って、妥協して出会ったばかりの男と結婚して落ち着こうと思ったんじゃないの？
カラスが鳴いた。私は唇を震わせながら歩いた。今日は本当に暑い。帰ったらアイスを食べよう。
東京での最後の日。りこは言った。私は、幸せだよ。
そうか、幸せなのか。幸せって言葉は、あぁやって泣き叫びながら声に出すもんなのか？
違うよね、りこ。
涙が一粒、頬を伝った。

妥協。まだ高校生だった私達に、妥協なんて言葉は頭の中にあっただろうか。
いや、無かった。むしろ妥協って言葉が大嫌いだった。無邪気で、無駄に強気で、妥協を許さない強さがあった。私達は若かった。完璧しか許さなかった。
でも、そうだ。気づいちゃった。
いつの間にか二十五歳になった。私達は、もう強くない。
夏の風が吹く。髪が揺れる。喉が渇いていた。見慣れた街並み。東京の、見知らぬ街並みで生きる友達。
私は、愛敬りこの結婚を素直に喜べない。その理由は明らかだった。
「……結婚、おめでとう」